

どんな一歩を踏み出すのか

上 廣 榮 治
うえ ひろ えい じ

何気なく古い『倫風』誌をめくっていたら、扉にこんな言葉がありました。「ほんとうにどんなつらいことでも、それがただしいみちを進む中でのできごとなら、峠の上り下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつです」(宮沢賢治「童話集」より)

こうしたすぐれた言葉に接するとき、私たちは共感したり感激して、「よし自分も」と奮い立ちます。特に皆様のように日々より善い生活の実現を志している方々には、そうした感動も決意も、ひととき大きなものがあるはずですよ。しかし、それではとりあえず何を始めるのでしょうか。「よし自分も」と奮い立ち、どんな一歩を踏み出すのでしょうか。

先般イラクで人質になった女性は、マザー・テレサに心酔して、カルカッタのマザーハウスでボランティア活動を始めた人だといいます。おそらく彼女もまた、何らかの縁でマザー・テレサの言動に触れて感動し、「よし自分も」と奮い立ったのでしょう。しかし、ここでは彼女について論ずることが主旨ではありません。

ただ、「よし自分も」と奮い立つことは、とても大切なことだと思えます。しかしもっと大切なことは、奮い立って、その第一歩をどこに向けるのかです。それはよくも悪くも、その後の人生を変えてしまうことにもなるからです。例えば、それまでの自分のあり方と、あまりにかけ離れた一歩であれば、彼らはたやすく挫折することになってしまいます。

彼女が心酔していたというマザー・テレサは、人が心に抱くべき大きな愛は、まず家庭において始められなければならないと語っています。「家庭に神の愛をもたらせば、平和と喜びがみち、それは隣人にも及びます。家族が共に祈れば共にあり、共にあれば愛し合います。愛があれば分かち合います。隣人を訪ね、その愛は自己犠牲にまで高まります。そして、愛はまた愛を生みます」(沖守弘著『マザー・テレサ あふれる愛』)と。

つまり、マザー・テレサの活動も、一足飛びにインドに至ったのではなかったのです。まず、家族と共に神に祈ることで愛し合い、その愛を隣人に広げ、さらにすべての人々に及ぼすというプロセスをたどっていたのです。着実に歩を進めて、ついに「すべての人々」にまで至ったのです。

マザー・テレサの偉大な歩みは、わが会の言葉で言えば「家庭愛和」から始まったのです。なるほど、家族の愛和が実現していれば、宮沢賢治が言うように「どんなつらいことでも」耐え抜くことができるでしょう。また、マザー・テレサの言うとおり、愛和の輪を広げていくこともできるでしょう。

しかし、わが会で日頃申し上げているところマザー・テレサの言葉には、「よし自分も」の第一歩という重要な段階で、大きな違いがあるように思われます。なぜなら、「よし自分も家庭愛和を」と思いついたとして、何をするのが違うのです。マザー・テレサは神を信じ、共に祈ることで家庭愛和の実現を説くのに対して、実践倫理では、まず自分を正すことで、その実現をはかるからです。

皆様の中にも、家族の問題から実践の道に分け入ったという方が、たくさんおられます。子どもの不登校、夫婦や嫁姑の確執など、そんな問題を解決したいと願って、わが会の門を叩かれた方々です。

では、それらの方々が実際に行なったのは、何であったでしょうか。もつと家族を愛すことだったのでしょうか。違います。家庭愛和の問題は、家族をむやみに愛したからといって、解決されるものではありません。むしろ、互いに盲目的な愛をぶつけ合えば、さらに確執が強まることにもなるでしょう。

そこで実践倫理では、家庭に問題を抱えている人には、家族に対する愛情や心配をいったん自制しなさいと勧めます。家族のことはひとまず置いて、まず自分の身を正しましょうと指導します。

古代中国の古典にも、「其の家を齊ととのえんと欲するものは、先ず其の身を修む」(『大学』)とあります。家庭愛和を望むのであれば、まず自分の行ないを正すべきだということですが、わが会の無数の実例に照らしても、まさにそのとおりです。

例えば、子どもの引きこもりを何とかしたいという場合、これまで以上に子どもに過大な愛情をかけても、何の効果もありません。親だけが自分をかばってくれる。外へ出ると迫害される。そう信じ込んでいる子どもは、ますます外へ出なくなってしまう。やがては、親の愛情や期待に応えられない自分を疎ましく思い、親とも会話ができなくなります。思い余って問いただしたり、学校へ行くよう叱責すれば、親を逆恨みするようにもなるでしょう。

わが会での事例によれば、こうした問題において最も効果があったのは、親が子どもにかける愛情や期待を「自制」して、倫理の実践に邁進まいしんすること、すなわち、自分の身を修めることでした。

自分の身を修めんとする親は、朝早く起きて、明るく挨拶し、気付き即行で活動を開始します。子どもを温かく見守りこそすれ、安易に甘やかしたり、小言を言ったりはいたしません。感情的な言動は徹

底的に慎みます。子どもも含めて、他者には笑顔で接し、人の悪を言わず、己の善は語りません。人には何の強制もせず、ひたすら自分自身が正しくあろうと努めます。

こうした精進の結果、ほとんどの事例において、日ならずして、子どもたちは引きこもりをやめ、元気に外に出て行くようになり、家族全体に愛和がみなぎり始めています。

自制されることのない愛情は、しばしば相手を追い詰めてしまいます。言わずもがなのことを言う。あるべからざる欲望を抱く。度を超えて感情をあらわにしてしまう。それら自制を欠いた言動がすべてのトラブルの元になります。互いに自制を欠いた愛情をぶつけ合えば、憎悪さえも湧いてきます。

家族の一人が倫理の実践によって身を修め、何事につけ自制された言動を取り始めると、やがてそれは他の家族にも及びます。つまり、「身を修めて家に及ぼす」ことになるのです。

すぐれた先人たちの言動に触発されて、「よし自分も」と奮い立つこと。それはとても大切なことです。それは、今の自分のあり方を反省して、より善い自分になろうとする、まことに正しい決心です。

しかし、そう決心した人が、まず真つ先に取りかからなければならぬことは、ただ高邁こうまいな理想に身を投じることではありません。何よりもまず、人に善い影響を及ぼすことができる自分になること、すなわち「わが身を修める」ことでなければならぬのです。

今の自分をしっかりと見つめなおし、ひたすら自分自身の身を修めるべく倫理の実践に励み、家庭愛和を実現する。そうしてはじめて、より大きな、次の一步を踏み出し得るのだと知るべきです。

そうした自分になれないうちは、それがどんなに「ただしいみち」であったとしても、「ほんとうにつらいこと」に耐えられるはずもないのです。「峠の上り下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつ」になるためには、道を歩む者の足が、十分に鍛えられていなければならぬのです。